

『視聴覚教育』一九五六年一月号（日本映画教育協会）

季節はずれの考察

—視覚教育に対する基本的な考え方について—



国立教育研究所 矢口 新

I・何々教育という言葉

この頃教育とか、学習とかの字の上に熟語をむすびつけて、何々教育、何々学習というのが随分多くなった。曰く生産教育、曰く視覚教育、曰く放送教育、曰く統計教育、或いはグループ学習、討議学習、現場学習、調査学習といった調子である。こういうことが何所から言われるのか知らないが、私はこれが実際の教育の場面でのように統合されるのが心配である。

現場の先生の何よりの関心事は、やはり毎日学習する教科の展開ということであろう。明日やる某教科の某単元をどうするかというところが一番心配であろう。それは現在の教育内容の構成が教科によってなされているのであるから当然である。方法もまたその内容を学習させるための方法であることは言うまでもないのである。

所が最近使われている何々教育とか、何々学習とかは、そういう教科と具体的な結びつきをどうするかという事を余り問題にしないようなものである。これらの言葉は何も本来教科の教育と矛盾したものでない。否、むしろ教科の教育を問題にしてその内容なり方法なりをいったものなのである。ただその或る一部の点を強調しているのである。所が言葉が出来上ると、それは独立の存在たることを要求する。そうしてその点だけがクロージアップされて、他の問題点は後ろにかくされる。それぞれの問題が、何れもそうして、自分だけの見地からそれぞれの意義を主張する。

こうなると、これらを学校の先生が現実学習の場でどう構想づけるかというものは大切な問題になって来る。つまり例えば生産教育というのは、様々な教科についての問題であるが、とくに社会科とか、理科とか、職

業家庭科とかに関係する主として内容の問題であろう。近代産業社会が必要とする教育内容を如何に構成するかという問題である。それは現場の先生に即していえば、明日行う教科、例えば社会科の内容をその見地から検討してみるということになる。そうして教育内容の構成が、近代産業社会の生活に必要な内容であるか、そのとりあげ方が産業社会の生活者の問題としてとり上げられているかどうかを検討し、そういう方向へ一歩でも二歩でも近づけようとする。併し社会科の内容構成はただその一つの見地から考えればよいのでない。まだ様々な見地がある。

放送教育というのは教材の提出の仕方の問題である。視覚教育というのもそうである。これも毎日の教科、例えば社会科についていえば、社会科の単元について、子供に問題を考えさせ理解させる場合に、どんな教材を使用するかということである。映画や放送を使用するといつてもただ使えばよいのではない。社会科のその単元の目標とする所があり、それに適切な教材をどうするかである。それにはその目標が何であり、児童生徒に何を考えさせ理解させるか、それには教材がどういう性質のものがよいか、その表現方式はどうであるのがよいか、そういうことが考えられて、場合によっては映画を使い、場合によつ

ては放送を使用するのである。映画や放送でなく統計を使用することがいいこともある。また場合によっては、現実の場面をみて来る方がよい場合もあり、自分たちで調査した方がよいこともある。そういう様々な方法の中の一つの方法なのである。

これと同じことが或いは統計教育或いは現場学習、或いは調査学習ということについてもいわれる。つまり何れも、社会科の単元の具体的な展開については、一つの要素であって、そのみで学習がなり立つのではない。つまりそういう考え方一つをもっていけば、それで学習が出来るのではないのである。所が一般にそれが、えらい学者などに問題にされる時には、他の点はすべてうしろに追いやられて、視覚教育や、放送教育や統計教育や、生産教育だけが単独で問題にされる。要するに具体的でないのである。抽象されているということである。現場の先生には、むしろそれらの様々な考え方を、一つ一つの具体的な単元でどう実現するかということが問題なのである。それは現場の先生が自分でやったらよいなどというのは、少し官僚的というべきだろう。とかくえらい学者先生には、そういう人がいるけれども。

例を社会科だけに限っていうけれども、こうして、社会科の教育をする先生には、或い

は放送教育派があり、生産教育派があり統計教育派があり、視覚教育派があり調査学習派があるのである。文部省の社会科のえらい先生でも、自分は視覚教育の問題に関してはよくわからないが、などといったいい方をする。こと社会科の教育を問題にして、その視覚教材のことを論議している時にである。これは何とおかしいことではないか。社会科の問題の外に出た、社会科の視覚教材問題があるということになるのである。これでは現場の先生はたまらないではないか。一方自分は社会科のことはよく分らないが、視覚教育についてはなどというえらい先生方もいる。誠に馬鹿々々しい限りである。

併しこれは何も一社会科に限ったことではなく、あらゆる教科についてであり、また視覚教育に限ったことでなく、あらゆる何々教育についてそういう状態が見られるのである。

何々教育という言葉を使うことがいけないのではない。そういう考え方をして、今の教科の教育を検討して行かなくてはならぬのである。それによって教科の教育に新しい生命が吹きこまれるのである。だから決して悪いことではないが、それが現にやっている教科の問題として展開されなければならぬのではないか。つまり具体的な問題として、

展開されなければならぬのである。いつまでも、一般論・概論であってはならないのである。

□・子供の環境として

視覚教育という言葉は、何も社会科や理科や、その他教科の学習に関する問題ばかりを問題にしているのではない。もっと広い、子供に娯楽映画をみせることも意味している。意味しているというのは、現実になんかいううに考えられているということである。

子供によい娯楽映画をみせることも大いにやらなくてはならぬことである。凡そ子供むきの文化ということについては、今の日本人は決してほめられる段階に達していない。あれほど大切がる教科書についても、もうけること一てんばりの教科書会社があったり、教員組合がそれを利用して金もうけをたくさんだりするのである。子供のにぎって来る金をたとえ十円でも、もぎとろうというのは大人の考え方としては浅ましい限りである。何も損をしるるとはいわないけれども、そこまですでに因業にならなくてもよい筈であるが、その辺に少し見当のちがった所があるようである。そういう状態だから、子供の文化を生み出すことについても決して高い才能を發揮しているとはいえない。

何時か東京都品川区の親子協議会というのに出た。これは、中学生と、PTAの代表との話し合いであったが、子供の方から私たちの見ていけない映画が沢山あるからそういうものをなんとかして欲しいという要求が出た。これはよく味わってみると誠に奇妙なことである。大人の方が考えなければならぬことを子供から要求されているのである。それがよい映画、どれがわるいということにももちろんいろいろ問題はあがあるが、しかし、子供に対して恥かしいと思うものを、親がよだれをたらして見ている場合もないとはいえないのである。だからこそ、映画会社はそういう人をねらってそういう映画をつくるのである。悪い映画が出来るのは、決して会社ばかりが悪いのではなく、大人が程度が低いからである。そういう状態では決して、子供のためのよい文化が生れる筈がないといつてよからう。

そういう時に、よい映画を子供にみせようという考え方で、映画をつくり、みせる工夫をすることは大変立派なことである。これは併し、こと映画に限らず、よい雑誌を与え、よい書物を与え、よい見せ物を与えるというように、あらゆる点に発展しなければならぬ。子供が読んでよい本を沢山つくり、図書館を拡充し、博物館や美術館やを沢山つくって、

子供にそういう世界をみせる事も同様に考えられなければならぬ。子供に積極的により環境をつくってやるのが本当に、子供を悪いものから防ぐことになるのであって、あれもいけない、これもいけないという、日本人流の禁止癖はやめないといけないであろう。こういうように総合的に、子供の文化的環境をつくってやることに向って、学校の先生のみならず、ありとあらゆる層の人が働くことは大切なことであって、そういう力の結集がよい映画を生み出すであろう。

併しそういうことを本当に理解してその実行について努力をすることの出来る人は数少いのである。一部の人々と学校の先生がただひとりあせているというのが現状ではないか。子供をもっている親も、その趣旨そのものには賛成なのであるが、実際にどうしたらそうなるのか、そもそもどこに具体的な問題があるのかということについては皆目見当のつかない人が多いのである。そういうことは一切おまかせするということになる。

ここに大きな問題があるのでないか。子供の環境をよくするような問題は、ただ学校の先生の問題でなく、一に社会全体の問題として処理されなければならぬのである。それが学校の先生の専売特許のようにされてし

まうともう他の人はそれから解放され、一般の大人は教育の事など考えないで、自分たちの大人の生活を楽しんでゆく。それが非教育的なことだとして知ってはいないのである。その人の考えでは、あえて非教育的なことをやっている積りではないだろうが、少くとも教育ということを考えないでいいという気持ちでやっている。そして自分の商売としてはまた大人の生活としては当り前のことだと思つてやっていることが、実は子供を育てるといふ見地からすると、非教育的なものとなっていることが多いのである。しかも一向それに気がつかない。実はその所を教育という見地から考え直してもらわなければ、本当に子供の環境はよくなるらない。しかしそこは一向に改まらない。こうして、子供の環境は、大人どもによつて悪くされているのである。或いはよくしようとして努力している人々のブレイキとなる役目を一般の大人が果たしているのである。

社会の生活全体が、子供を育てるといふ点からみて考え直されなければならぬことが多くあるのである。それが直らなければたとえ子供のために、二、三の映画が出来たり、二、三の書物がつくられても、子供がよくなることはないのである。こう考えると、どういふ人間が出来るかということとは、その社会

がどれだけ高いものをもっていかるとい
ことと一番深い関係があるのである。

いい映画をみせ、いい書物を読ませるとい
う運動が、学校の先生や、一部の児童文化の
専門家にまかせられ、更にもう特別に視
覚教育や、図書館教育をやる先生にまかせら
れていては、とても、そういうことは実現し
ないのである。PTAや婦人会やその他各種
の教育団体の人々、教育行政家の人々の協力
によらなければならぬ根本問題なのであ
る。それが専門家の仕事となると、もういけ
ないのである。その専門家がやっていけば、
他の人は考えなくてもよく、協力しないでも
よく、逆にそれと相反することを平気でやっ
て、さいのかわらのように、つみあげる一方
ぶちこわして行っているのである。専門家に
まかせっぱなしで、まかされっぱなしだと、
だんだん線が細くなって、しまいに道が見え
なくなるおそれがあるのである。

目・勉強のチャンス

ナトコによる巡回映写が戦後行われて、教
育映画は一般社会教育の中に大きな地位を占
めたかの如く見える。それはそれでこれまで
映画をみることの出来なかつた人々に、映画
をみせることに大いに役立ったのであるから
よいけれども、映画というものがそういう見

方をしかされないものであるという習慣を植
えつけてしまった所に大きな問題がある。

地方の青年団や青年学級へ行くと一番問
題になっていることは、指導者のいないこと
である。何か研究したいと思っても、実際に
指導者がいないから出来ないということが
いわれる。どんぐりの背くらべでは、すぐに
つかえてしまうというのである。これはなか
なかむづかしい問題である。

青年学級は、日本における最も貧弱な教育
機関であつて、金もなく、指導者もなく施設
もなくという具合に、ないないづくしの学校
なのである。中学校卒業後の青少年の半数は
働く青少年となるのであつて、それらの青少
年をどう育てるか、日本社会の今後に大き
い影響を及ぼすのである。所が殆んど雀の涙
ほどの金をしか社会は出していないために
彼等は勉強したくも勉強出来ないでいる。大
人は青少年にいろいろと要求はするけれど
も青少年のために、殆んど何もやっていない
といつてよい社会なのである。

指導者がいないという声は青少年の中か
ら何時も出る。実際は、そういうことをいう
のはおかしいことで、自分達の先輩が沢山い
るのであるから、その先輩達によって指導さ
れてゆくのが次の世代の青少年なのである。
その先輩がいないなどということはおかし

いことである。いないわけではないが、先輩
が後輩を指導してくれないということであ
ろう。ここに、日本の社会の問題が根本的に
あらわれているのである。大人は青少年の指
導などというものは誰か専門家のやること
だと思つていたのであろう。青少年たちも亦
そういう専門家がいないでは指導者でない
と考へているのであろう。もちろん専門的な
指導者が出てくれば、それにこしたことはな
いが、そうなるためには、大人の間、即ち
社会に青少年を指導しようという雰囲気
起つて来なくてはだめなのである。そういう
雰囲気がなく、誰かがやってくれるだろう、
それもいいだろうという程度では、とても今
迄出来なかつた青少年教育を新しく組織づ
けることは出来ないのである。例えば金の出
所にしても今迄それぞれ金を使つていたの
であつて、その伝統があるから、どこといつ
て金が余つてゐるわけではない。いくら専門
家といわれる人が要求しても、一般の大人は
そういうことを考へてはいないのである。そ
こへ金が廻されてくる筈がないのである。こ
うして、何時迄立つても、貧弱さから抜け出
すことが出来ないでいる。

それでも青少年は、いろいろと考へて何と
か勉強しようとしてゐる。共同学習運動とか
生活記録運動とかいろいろ考へ出している。

そういう言葉が出来るともっともらしく聞かせるけれども、その場合でも依然として指導者がいないことにかわりがない。共同学習とって試してみても、どんぐりの背くらべで、少しやっていると行きづまりになるし、生活記録、つまり綴方を書いて試してみてもすぐ行きづまる。またそれを話題にして、話し合ってみても、やはりどんぐりである。すぐたねがつかるのである。結局、いろいろとぐちをいう綴方を書いて、それをもとにして、ぐちり会をやつて、あきてしまうという段階におちいつてしまう。

青少年団体にしても、こういう点は同然である。青年団などというものは、昔からの伝統をもつていて、村の生活に深く結びついている。昔からきまつた行事をきまつたようにやつて、やれ村の運動会、やれレクリエーション大会、やれお祭りといったことをくりかえしている。それでかけずり廻っているのは、役員となった人達であつて、一般に村の青少年は自分の勉強はしていないのである。

婦人会もまた、昔からの伝統ある団体であるが、社会教育団体といわれる程のことはない。やれ防犯、やれ防火、やれ選挙といった時に動員される団体であつて時たま講演会が行われるのが、社会教育団体の名をつけられている所以であろう。

いわゆる社会教育団体というものにはP

TAも入っているようである。PTAはBTAかなどといわれる場合もあるが、これも決して子供のお父さん、お母さん方の勉強のための団体にはなっていない。何と試しても大きいのは寄附をすることである、PTAの場合に人が集まらないというのが金を集める相談か、その承諾であるなら形式的にやればよいのだから人が集まらないのは当然なのである。

こういうようにみて来ると、どの団体でも勉強のチャンスが与えられるようになっていないのである。ここへ勉強のチャンスを提供するものは、視覚教材だと思うのだが、どうして、そういう気持ちにならないのだろうか。青年団や青年学級が問題をつかまえて研究するとき、よき指導者となり、助言者となるのは、一定の考え方をもつて構成された視覚教材、つまり映画であると思うのだが、そういうものを使用して勉強しようと考えないのである。小、中学校の学習に映画が使用されている地域でも、青少年の勉強となるともう全くそんなことは考えてみもしないのである。映画は巡回されて来て、みるものと考えている。

PTAや婦人会についても同様である。勉強となると、たまに名士をつれて来て、講演をきく位がせきのやまなのである。若し、毎月一回でも、子供がみる教材映画をみて、子

供と一緒に勉強しようということを考えるなら、婦人の社会的知見はすぐに高まるであろう。それが日本の婦人の位置を高める所以でもあり、ひいては政治意識を向上させる所以でもある。一巻の映画は十分であるから、三十分の時間でもあれば何か一つの問題について勉強出来るのである。こういう勉強の仕方を考えることは、今突飛なことではない。所が視覚教育の盛んだといわれる学校でも、決してそういうことは行っていない。大人はそんなことは夢にも思っていないのである。

そういう所から、視覚教育ということが育つて来る筈もないし、そういう社会からよい視覚教材が生れて来る筈もないのであろう。視覚教育を多く人々の仕事は、こうしてみると沢山あるのである。ただ視覚教育といつても、一向うだがあがらないではないか。それこそ、青年学級や、青年団や、4Hクラブや、婦人会や、PTAの中へ入つて行つて、それらの人々の中で進んだ人々と一緒になつて、その団体をどうして、本当に意義ある社会教育団体にするかを考えることが大切なのではないか。その中に必然的に、視覚教材を必要とする場面がさがし出されて来なくて、いけないのではないか。外からおしつけたものとなつては、大衆はついて来ないのである。